August 2015 vol. 03

ELTama Newsletter

発行：玉川大学英語教育研究会　〒194-8610　東京都町田市玉川学園６-１-１　tel. 042-739-8816　fax. 042-739-8847

ご挨拶

文学部教授・ELF センター長
小田眞幸

本年度より高橋貞雄先生の代わり、玉川大学英語教育研究会（ELTama）の会長に就任いたしました小田眞幸（おだ　まさき）です。宜しくお願いいたします。私はちょうど30年前の1984年3月、当時の文学部外国語学科英語専攻を卒業し、その後6年間、米国の大学院で学ぶ傍ら、学部での英語及び日本語教育に携わったのち、1990年4月より玉川大学文学部で教鞭をとっております。それ以来、様々な学部の英語の授業を担当させていただきながら、いつの間にか文学部で勤務年数が最も長くなってしまいました。教員養成に直接関わる科目を担当する機会はあまりありませんでしたが、教え子にも恵まれ、ゼミの卒業生だけでも約30名が現在小・中・高・大で教えています。

すでにご存じの事と思いますが、玉川大学でもここ数年様々な改革が行われています。まず昨年、世界でもあまり例を見ない、ELF（English as a Lingua Franca：国際共通語としての英語）の学修プログラムを提供するELFセンター（CELF）を開設しました。同センターでは15の母語を持つ経験豊富な教員が全学向けの英語の授業を担当し、グローバル化に対応すべく「多様性」を重視した英語教育を推進しています。また本年度より、文学部比較文化学科が英語教育学科に改組されました。新学科は英語教員養成コースとELFコミュニケーションコースで構成され、2年次から3年次にかけて全学生がアメリカ、イギリス、アイルランドの提携大学に留学する他、英語による授業も倍増し、教員養成においては英語力、教師力双方を養成するに当たり充実したプログラムが展開される予定です。

今後も皆さんのお力をお借りしながら、さらに挑戦を続けて行くつもりです。ご指導、ご助言をよろしくお願いします。

（外英84）

Self-Improvement

神奈川県立伊勢原高等学校　総括教諭
相原完爾

はじめに

1982年に文学部英米文学科を卒業し、神奈川県平塚市内の公立中学校に勤務した。当時、日本の多くの学校では、学校の荒れが社会問題となっていた時代で、校内暴力、喫煙、いじめといった問題が新聞を賑わしていた。教師にとって空き時間は校内巡回におわれ、とても教材研究するどころの状況ではなかった。

ことばの面白さ

そんな中でも忍耐強く教員生活を続けられたのは、「語学への好奇心」があったからではないかと考える。中学校教員時代はZandvoort（1969）の *A Handbook of English Grammar* を、丹念に辞書を引きながら読んだ。丁度読み終わる頃、大修館書店から竝木崇康先生の『語形成』（新英文法選書 第2巻）が出版され、一気に単語のでき方について興味が湧いた。特に接尾辞 -er は動詞・名詞・形容詞に付加し、「動作主」から「道具」までの様々な意味を備え、生産性も高かったからだ。また形態論（単語の文法）と統語論（文の文法）の接点である「項（argument）の継承」についても興味を抱くようになった。例えば、動詞 put は「動作主」「主題」「場所」を表す3つの項を義務的に取るが、（1）のように「過程」を表す接尾辞 -ing が付いても3つの項をそのまま引き継ぐが、（2）のような「動作主」を表す接尾辞 -er が付くと3つの項を取れなくなる。なぜ接尾辞によって、項の継承に不具合が生じるのか疑問である。接辞付加と項の継承は、言い換えれば「名詞化（Nominalization）」と深く関連している。

（1） the putting of men on the moon
（2）*America is a putter of men on the moon.

* は非文を示す。（Randall （1988:134-135））

高校に移り、39歳のときに大学院に入学した。Grimshaw（1990）の *Argument Structure* を読んだが、体を壊して入院した。体調のこともあり、その後、しばらく言語学から離れていたが、どうしてもことばへの興味は諦めきれず、指導教官が主宰していた英語史の勉強会に参加し、現在も研究を続けている。

今は動詞が持つ固有の意味がどのように文中で表されるのか、意味と格付与との相関関係について興味を持ち、古英語（OE）の *AElfric's Lives of Saints*（990年頃）を題材に、名詞化と前置詞句のデーターを収集している。特に現代英語（PE）では、名詞化の目的格関係は of で表すことが可能で destruction の右に必ず来るが（例 the destruction *of* the city）、OE では *of* を用いず *'s*（正確には属格）で表し、destruction の右にも左にも来て目的格関係を表すことができた（the city's destruction / the destruction the city*'s* ）。また、OE の前置詞 of は「所有」以外に from と同じ「起点」を表していた。どのような過程を経て of から現在の from に変化したのか興味深いところである。

英語教員として思うこと

ところでこれまでの教員生活を振り返って、大きな転換期を迎えたのは、「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーションの育成」が明記された2002年の学習指導要領

施行であった。教科書も物語文から会話文が増え、授業もALTとティーム・ティーチングを行うようになった。これまで中学・高校時代に自分が経験してきた英語の授業と全く異なっていたので、毎日の授業が模索の日々であった。現在でも疑問と感じていることが2つある。1つはALTとの授業で、ゲーム等ではなく教科書を用いて考えさせる授業を行うことができるかということ。2つ目は「協同学習」の在り方である。お互いに意見を出し合うことは大事であるが、個々の生徒が授業の内容を実際に理解できたかは甚だ疑問だからである。

教職を志望している学生の皆さんにお願いしたいことは、「分かりやすい授業」「いかに教えるか」等の教授法は重要ではあるが、教員自身が生涯、興味を持って絶え間なく学んでいけるバックボーン・テーマを持ってほしいということである。突然、生徒から質問があった時に、興味あることを夢中になって話していくと、普段授業を聞いていない生徒でも一生懸命聞いてくれることがある。つまりどんな生徒も好奇心を持っていて、何が大事なことなのか、かぎ分ける本能を持ち備えているということである。学校現場も「不祥事・事故防止」と騒がれ、分掌業務も増え、英語に触れられる時間も少ない現状であるが、本業の英語力が先細らないように自戒も含め精進したいものである。

実践・研究ノート

公立中学校での２年目の事例報告

川崎市立玉川（ぎょくせん）中学校　教諭
川原美菜子

はじめに

私が勤務する川崎市立玉川中学校は、川崎市中原区という、市のほぼ中部に位置する。生徒も非常に素直で、人懐こい子が多く、3学年とも4学級の中規模校で温かい学校である。1年目の3年生の副担任を経て、2年目は1年生の担任として、1年生4学級の英語を担当している。授業での事例や、教育現場に出てみて学んだことを紹介する。

１年目～授業づくり～

3年生4学級の授業を担当し、「授業づくり」の1年間であった。1レッスンあたり2時間を想定し、最初の1時間は新出文法の導入、次の1時間は教科書本文の内容理解に充てた。新出文法の導入の時間では、Focus on Formによる言語活動を意識し、ペア活動やグループ活動を取り入れた。教科書本文の内容理解の時間では、音読に加え、Oral IntroductionやOral Interactionを用いた。True or False QuizやDictationを行い、本文の内容が流れないように定着を図った。

本文の音読活動では、「音読プリント」を用意した。これは、英語の読み方がついているレベルから、レベルが上がるごとに単語が虫食いになっていき、やがて日本語の訳を見ながら音読するレベル、最後は何も見ずに本文を音読するという段階別のプリントである。このプリントが生まれた背景には、授業を通して感じた課題がある。それは、①多様な生徒への対応、②英語への関心・動機づけの難しさである。アルファベットの読み書きができて当然という生徒もいれば、文字の認識や、文字を書くことに困難を感じる生徒もいる。さらに、英語を得意とする生徒は単なる音読では飽きてしまうため、本文を少しずつ暗記できるように難易度を変えながら、関心を引くような工夫を加えた。

２年目～１年目の課題を活かして～

1年目の課題を活かして、1年生4学級の授業では、基礎・基本の定着を目指した授業展開を心がけている。生徒の様子から、小学校での外国語活動の効果を感じることもある。それは音声のやり取りができることや、生徒の反応から、教室英語の指示が伝わっていると感じられることなどが理由として挙げられる。音声の定着が感じられる一方、音と文字の結びつきに困難も見られる。

1年目で培った授業の流れは変えず、生徒の実態に応じた活動を取り入れている。例えば、教科書を暗唱するための「英語ペラペラシート」は、教科書本文が日本語→英語、英語→日本語の対訳があり、ペアになって互いに読み合う活動を行っている。1年生の本文は比較的に短く、平易であるため、暗唱しやすい。英単語テストは、テスト用紙に問題が印刷されているのではなく、教師が当日に音声で英単語を言い、生徒が書き取る形式にした。これは、音と文字の一致を定着させるためである。

また1年目より、会話が続かず、単語だけに頼ってやりとりをさせてしまっているという点にも工夫が必要だと感じていた。これを受けて、新出文法の導入の時間では意図的に繰り返し発話させるような文脈を考えた。ペア活動での一例を紹介する。

例）A: Did you watch TV yesterday?
　　B:（Yesの場合）Yes, I did. I watched TV yesterday.
　　（Noの場合） No, I didn't. I didn't watch TV yesterday.

質問に答え、さらに質問と同じ内容を述べるという、多少しつこく感じる文脈である。しかし、ただ単なるYes／Noの受け答えだけというのも、素っ気ないだけでなく、答え手の発話量を増やしたかったため、このような文脈を意図的に取り入れている。

おわりに

1年目と2年目の授業の実践例を述べてきたが、実践例以外に常に心がけていることは、①1時間の授業内に4技能を取り入れる、②できるだけ授業内は英語で話す（もちろん日本語も取り入れなければ伝わらないこともある）、③生徒の言語活動の時間を確保する、④ワークシートや活動のルールを簡潔にする、⑤授業の流れや活動の見通しがわかるように可視化する、⑥ICT（iPodやiPad）を積極的に使用し、視聴覚情報を利用する、などが挙げられる。また、「わからない」は「わかる」になるチャンスであること、「わからない」「できない」は恥ずかしいことではない、間違えても良いから挑戦して取り組もうということを日頃から生徒に伝えている。

公立中学校には様々な生徒が通っている。「様々」というが、英語が好き・得意という生徒もいれば、英語が嫌い・苦手という生徒もいる。学習支援を要する生徒もいるだろう。他にも様々な背景を抱えた生徒もいるだろう。しかし、これは

公立中学校に限ったことではないと考えている。いつであろうとどこの学校であろうと、どの生徒に対してもわかりやすい授業であること、そして英語が活用できる生徒を育てることを、これからも大切にしていきたい。

中高一貫校での事例報告

静岡県西遠女子学園中学校・高等学校　元常勤講師
高林　永

私立一貫校だからこそできる教育

私が勤務していた静岡県西遠女子学園中学校・高等学校は私立中高一貫の女子校であり、様々な特色ある教育を行っている。今回は私自身が大学院で行った協働学習の研究と一部からめながら紹介していく。

まず一つ目に、我が校では、生徒の成長過程を6年間という長い期間を通してみられるという利点を活かし、姉妹活動に力を入れている。姉妹活動では、全校生徒を30グループに分け、中学1年生から高校3年生までを含んだ各グループで日常の掃除を行ったり、遠足に行ったりする。姉妹活動を通して、縦社会を経験することは、生徒たちにとってとても大きな意味がある。特に最上級生である高校3年生は、リーダーとして集団をまとめていく難しさや、上級生という立場で自分が後輩にできることを学んでいく。後輩もまた、先輩の姿を見ながら自分の目標を設定できたり、自分がこれから経験することの体験談を直接聞くことができたりする。同級生という横の繋がりだけでなく、縦の繋がりが学校生活に加わることで、人間的に成長する機会が増える。

二つ目に、Jタイムという自学の時間を設けているということである。Jタイムは家庭学習をする力を身に付けることを目的とし中学生のみ週3回行っている。Jタイムでは、英単語や計算、漢字など基礎となる部分の強化を授業の初めに行う。英単語はアルクのキクタン4000を使用している。英語科の教員が放送でワンポイントアドバイスを付け加えながら、中学1年生から3年生まで一斉に付属のCDに合わせて音読を行った。一週間に3回あるJタイムの時間に毎回行い、一週間は同じ所を繰り返し行った。単語数を増やすという意味でとてもいい方法ではあるが、教科書の新出単語に加えてキクタンを行っても、覚えるべき単語数が多すぎて扱いきれない生徒が居たり、1年生から3年生まで同じ単語を行ったため、学年毎に適した単語に焦点を絞れなかったりと改善の余地がある。基礎学習後の残った時間で、学年ごとに各学年の責任教員が普段の授業では扱いきれないような長文のプリントを用意し、各自のペースで取り組んだ。つまずいているような生徒には教員が声をかけ、ヒントを与えたりしながら解き方や、考え方を学んでいる。

実際の授業について

次に実際の授業の様子を紹介していく。中学校の教科書は*TOTAL ENGLISH*を使用している。授業の流れとしては、教科書の目標文の文法事項を教え、新出単語、本文の訳という形で授業を進めている。私が最も力を入れていたのは文法の導入である。英語は言語なので、どのような場面で今習っている文法事項を使えるのか、実際の生活に結び付けて理解することが大切なことだと考えている。そのため、授業で文法を導入する際、状況が分かる絵を複数枚用意し、生徒たちに何回も目標文を口頭練習するようにしていた。実際に行ってみて、ただ説明するだけでは無く、絵を見て視覚的に理解できる点、生徒に声を出させることができる点でかなり効果があったように感じる。生徒の姿勢を能動的なものにするのにも役立った。

次に高校のリーディングの授業の様子を紹介していく。リーディングの授業は基本的に英語で行う。まずは文法の説明をし、本文をある程度まとまりで捉えられるように、チャンクごとに区切って音読。音読はチャンクごとに3回読むようにしている。1回目は教員に続いて教科書を見ながら読み、2回目は教員に続いて教科書を見ないで読む。最後の3回目は教科書を見ずに、生徒たちだけで音読。全文訳はせず、音読後に本文の内容に関する質問をし、本文の内容が理解できているかを確認という流れで授業を行っている。高校では講座別授業を行っており、私が担当していた講座には英語が苦手な生徒が多く居た。実際に英語で授業を行ってみて、最初から分からないと諦めてしまう生徒がいたり、私自身生徒が理解できているのかいないのかが掴めなかったりと難しいと感じることが多々あった。そこで、文法の説明などは理解することに重点を置こうと考え、日本語で授業を行い、残りの部分でなるべく多く英語使用するよう心掛けたり、英語で授業を行う部分では何度も同じことでも繰り返して言ったり、授業のパターンを固定し、何を行っているのかが伝わり易くなるようにしたりなどの工夫をした。最初の頃に比べ、生徒も少しずつ慣れ、前向きに取り組んでくれる生徒が増えたように感じる。

協働学習について

毎回できるわけではないが、自分の修士論文のテーマであった協働学習を授業でなるべく多く取り入れるように意識した。修士論文では、協働学習を効果的に取り入れるために、教師がしなければならないことを考察していくことを目的とした。協働学習を複数の人間が協力しながら学び合い、良いクラスルームカルチャーの形成につながるものと定義をし、授業中の教師と生徒のやりとりを分析した。協働学習が効果的に行われる場合を3段階に分けて結論づけた。第一段階では、教師の問いかけにより、生徒が安心して授業に参加できるようになる。第二段階では、安心して授業が受けられているため、生徒からの意見が出やすくなり、活発は意見交換がしやすくなることで、組織が活性化されたり、クラスルームカルチャーが形成されたりする。第三段階では、第二段階で組織が活性化されたり、クラスルームカルチャーが形成されたりすることで、生徒の理解深化を促進させることができ、質の高い授業に繋がると結論づけた。

実際に協働学習を授業で行ってみて、きちんと協働学習が効果的なものになるように第三段階まで持っていくためには、かなり緻密な事前準備が必要だと感じた。実際に多くの失敗も経験した。例えば、グループ内の役割を決めずに行ってしまったため協働学習に積極的に参加していない生徒を作ってしまったり、英語を使うべきアクティビティーにも関わらず日本語が聞こえてしまったりという失敗をした。今後は同じ失敗を繰り返さないために、グループを組む際に生徒のレベル、性格、アクティビティーに対して人数は適切かな

ど細かい所まで留意してグループを決めたり、生徒が自信を持って英語を使えるように、きちんと練習をしてから協働学習に移るようにしたり、これからも試行錯誤しながら進んでいきたい。

英語授業にＶとＷを

東京都目黒区立第八中学校　主任教諭
仲　圭一

はじめに

2012 年、iPS 細胞作製したことでノーベル賞を受賞した山中伸弥教授のことは多くの人が知っていると思います。山中教授の話の中で次のようなものがあります。

「米国で習った一番大切なことは、研究者として成功するには「ビジョン（Vision）とハードワーク（Hard Work）」、つまり目標をはっきり持ち、一生懸命やることです。これは当たり前のようで難しい。日本人は勤勉なのでハードワークは得意です。でも、ビジョンがなければ無駄な努力になってしまう。」私はこの言葉に強く感銘を受けました。

中学校卒業時、生徒にどんな力を身につけさせたいのか？各学年での到達目標は？教師は生徒の英語力についてビジョンをもたなければならないと思います。それは授業単位といったミクロ的な視点だけではなく学年終了時、卒業時といったマクロ的な視点の両ビジョンです。それらのビジョンを軸に、一つ一つの授業に臨んでいかなければなりません。

生徒に身につけさせたい力

（１）英語に対するモチベーション

何事も「やる気」が能力の向上に大きくかかわってきますが、忍耐力が大人より乏しい中学生の「学習へのやる気」を高く維持するためには教師は様々な工夫・配慮をしなければなりません。中でも英語を使って自己表現をするチャンスを多く作ることは極めて大事だと感じています。ALT とのスピーキング活動やスピーチ発表、作品展示、自由英作文等、自分のことを表現・発信することは強い「やる気」を引き出します。中学生は自己表現をしたがっています！

次に学習内容に適度な負荷を与えなければなりません。簡単すぎてはチャレンジ精神が育ちません。難しすぎてはできる喜びを得られません。授業が終わった後に何かしら得るものがある、すなわち毎時間お土産のある授業が望ましいと言えます。

また、授業をする教師の存在も重要です。生徒と同様に教師も英語の学習者の一人です。良き学習者としての教師、更には生徒にとっての良き English speaker のモデルとしてあるべきです。「先生みたいに話したい。」と思わせることができるかどうかが重要です。

（２）基礎・基本の徹底

中学校の英語学習の基礎・基本は「音読」であると思っています。授業では教科書の本文を 10 回以上生徒に読ませ、そして家庭学習でも多く音読をして記録するよう指導しています。加えて発音に関しても [th][f][v][l][r] といった特別な発音を授業で新出語句や音読指導の際に繰り返し確認・練習を行っています。中学校英語の基本は「教科書本文を正しく読めること」と生徒には何度も伝えています。

また、授業以外の場面で英語に触れることが英語力を伸ばす土台となります。そのため、自分で継続的に学習する力を身につけさせる必要があります。自主学習用ノートを作らせ教科書本文をベースにした書き換え文の作成、ラジオ英会話を通じて学習した重要表現や語彙を書かせる、テーマを設定し英作文をさせる等々。強制的に自分で考えて学習する環境を作ってあげることが、自主学習のきっかけとなります。ほんの小さなきっかけを作るだけで生徒の学習量は倍増していきます。

（３）積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度

英語に対するモチベーションが強く、基礎・基本がしっかりとできていると自信が生まれます。その状態で教師や ALT との会話をする場面を多く設定することで積極的にコミュニケーションをする態度が育ちます。毎授業、あいさつ後は簡単な Oral interaction を行っていますし、ALT との interview test 等も多く実施しています。output の活動が多ければ intake が促進され、表現方法の選択肢も増え、コミュニケーションをする気持ちも積極的になります。

リズムある授業のために＜用意周到なだんどり＞

英語力の向上のためには、授業において 4 技能を統合的・総合的に活動実施することが望ましいと言われています。そのため他教科より授業内での活動数が多くなります。また、基礎・基本の定着のためには既習事項を何度も繰り返し学習させることが必要です。加えて生徒を飽きさせない工夫もしなければなりません。「リズムある授業」に生徒を引き込むことで活動の一つ一つにメリハリがつき、生徒の集中力を高く維持できます。

リズムのある授業の作り方はアドリブではできません。「用意周到な段取り」、すなわち毎時間の指導案作成がカギを握ります。良い授業を組み立てるためにはどんな目的でどのような活動をどういった順番で行いたいのか明確なビジョンが必要です。そのビジョンを形にしたのが教師にとっての台本、指導案なのです。

また、生徒の実態・特質を把握し、それに応じたアプローチをとることもリズムある授業では大切なことです。学校の地域性や各学年生徒の特性等を考えたうえで指導方法の微調整を行うことのできる柔軟性も教師は持ち合わせるべきです。

話し方（大きな声と小さな声の使い分け。間の取り方等）もリズムある授業に大きな影響を与えます。ただ単に大きな声だけを張り上げていてもリズムある授業は生まれません。重要な事を話す前にタメを作るなど、「間」を意識することで授業のテンポがよくなります。

そして簡潔で的確（Short and Simple）な指示をすることも日頃の授業で意識をしております。

指導すれば「生徒はできるようになる」

最期に教師は生徒の可能性を信じて指導しなければなりません。示範授業で生徒が積極的にペラペラ英語を話している様子を見て「ウチは無理。」なんて思っていませんか？ビジョンをもち、指導すれば生徒はできるようになります。指導しなければいつまでもできません。生徒の青写真を描くことは教師にとっては最大の責務です。